



ジルコニウム化合物のトップメーカーとして発展

◆2006年3月期上期トピックス

第1に、総額40億円の投資を行い、平成19年秋完成を目指して福井県に新工場建設を予定している。10月で土地取得が完了し、現在は基本設計の段階で、今年度末から来年初頭にかけて建設工事がスタートする予定で、市況や開発の進捗状況等を見ながら建設を進めている。主な生産予定品は、ファインセラミックス、2～3年後には更に拡大が期待される燃料電池材料、電子材料用、および光学用等のジルコニアである。平成19年度中には島根、大阪、高知にある工場の生産能力がいっぱいになることを想定して工場建設を進めているが、現在は若干売上が見通しを上回っているため、市況の状況に合わせて建設を早める可能性もある。

第2に、株主還元策について、多くの方に参加し興味を持っていただくため、9月20日現在の株主に対し1対2の株式分割を行い、新株は11月10日に効力が発生する。今のところ市場からの調達は考えていないが、近い将来の業績推移によっては、増産投資、研究開発投資が必要になってくるので、その時のために資金調達の手段を万全にしておきたいと考えている。また、当社が来年5月21日で満50年を迎えるに当たり、期末に1株当たり6円25銭の記念配当を実施する。

◆2006年3月期中間決算業績

当社は、ジルコニウム、セシウム、その他の希土類、ジルコニウム周辺の元素化合物など無機化合物を生産するメーカーとして昭和31年に設立された。

主な販売先は、自動車部品メーカー、触媒メーカー、電子部品メーカー、セラミックメーカー、耐火物メーカーなどで、自動車関係が最も多く70%を占めている。用途別販売実績では、触媒が54.7%（前年同期比3%増）で最も多く、次いで耐火物、電子材料、その他、ファインセラミックスの順となっている。

地域別販売実績は、国内が61.5%で最も多く、次いで北米、欧州、アジア、その他の順である。

中間期の業績は、売上高56億71百万円（前年同期比7.4%増）、営業利益4億34百万円（同21.4%減）、経常利益4億78百万円（同14.7%減）、中間純利益2億87百万円（同28.5%増）となった。売上高増加の要因は、触媒用途が3億37百万円増加したことが大きい。営業外損益は、為替差損益が約24百万円改善し、44百万円（同37百万円増）となった。特別損益は、前期あった特許の訴訟損失1億36百万円がなくなりマイナス31百万円（同1億6百万円増）、税引き前当期純利益は4億47百万円（同24百万円増）となった。

損益の増減要因は、増加要因として操業度の上昇効果により3億92百万円の売上増に伴う利益増が1億56百万円あった。減少要因は、昨年から続けてきた設備投資の影響で減価償却費が30百万円増加、研究開発要員の増員、試作設備等で研究開発費が73百万円増加、値引きなど販売価格低下51百万円、原料費上昇64百万円、使用原料の変化による差異32百万円、その他経費増25百万円などで、全体として営業利益が前期比で1億19百万円減少した。

貸借対照表では、現預金が若干増加し、受取手形は若干減少、棚卸資産は原料の値上がりを見越して前もって購入している分と販売増加に伴う仕掛品の増加などで約4億円増えている。自己資本比率は77.6%となり、今後の資金需要に現在の良好な財務内容を有効に役立てたい。

◆用途別売上高推移

1) <触媒> 当社は、自動車の排ガス中の有害物質を取り除くための助触媒として、ジルコニウム化合物をつくっている。ジルコニウムは酸素イオンを移動させる伝導体であり、その効果で触媒の働きを助け、また酸化ジルコニウムは耐熱性が高く高温でも劣化しないため、高温でも貴金属の性能を劣化させない触媒ができる。

売上高は、低落していた北米向けが底を打って回復してきており、構造的な問題が解決したことで31億3百万円（前期比13.7%増）となった。欧州市場は、ガソリンエンジンよりもディーゼルエンジンが多いことと競合会社が欧州に2社あるため今期は減少となったが、欧州はシェアの争いとなるので、戦略を立てることににより業績を回復させていきたい。アジア、その他の地域（南米、豪州）も自動車用触媒が出ており、自動車の

生産台数に比例して伸びていくと考えている。2008年に走行モードの規制が強化され、触媒としてジルコニウムが使用されることがほぼ決まり、今後もこの方向で行けば売上は堅調に推移すると見込んでいる。最近規制強化に伴い、従来のアンダーフロア触媒だけでなく、スタートアップ触媒としても低温で活性を示し高温でも劣化しないジルコニウムが使用され、2008年以降もガソリンエンジンの触媒の主流になることがほぼ決まったと考えている。

2) <電子材料・酸素センサー> 電子材料の売上減少が大きく影響し約10%減少した。電子材料向けはセラミックコンデンサーに使われているが、ジルコニウムを使わないセラミックコンデンサーが増え、また小型化し使用量が減っているため、衰退していく分野であると考えている。自動車のコモンレールのバルブに使う装置を開発中で今後に期待しているが、電子材料としては衰退していく予想である。

酸素センサーについては、日本市場では100%、世界的に見ても75%超のシェアを占めているが、小型化などで売上が若干減少した。将来はもっと低温で作動する触媒が求められており、高機能の酸素センサーができる材料の開発に取り組んでいる。

3) <耐火物・ブレーキ材> ここ数年増加傾向にあった耐火物が当中間期ではやや減少したが、ブレーキ材はかなり増加している。ブレーキ材は、ジルコニウムが持つ性能をブレーキに使うにはどうしたらいいかを研究し、ブレーキ材として使えるように提案していきたいと考えており、今後も増加すると予想している。

4) <ファインセラミックス> 燃料電池の伸びにより全体としては伸びている。フェルルル、粉碎メディア、台所用の刃物、人工骨の材料などに使用されている本来のファインセラミックスは、本格的に使用される時代がまだ到来していないため、当中間期は売上が減少した。しかし燃料電池は、予想の3倍の勢いで伸び前年同期比420%増加した。現在はまだ本格的に使われているわけではないが、世界的に燃料電池開発の機運が高まり、その影響で燃料電池材料の試験品の出荷が増加している。できるだけ早く燃料電池を使える形にして立ち上げるのが第一と考え、電解質をつくるだけでなく電極材など周辺を開発しているところとアライアンスを組み協力しながら、原料の開発を進めていきたい。

5) <その他> 自動車のラジエーターやクーラーのアルミの溶接材に使われるセシウムの売上は伸びているが、製紙用・塗料用などのジルコニウムは若干衰退している。セシウム以外は今後も大きな伸びは期待できないが、最近ではクロム・鉛など有害物質に替えてジルコニウムを使う動きもあり、別の方向から業績を伸ばすことができると期待している。

◆2006年3月期通期予想

下期予想について、売上高は触媒28億30百万円、電子材料・酸素センサー 8億円、耐火物・ブレーキ材7億80百万円、ファインセラミックス4億円、その他5億19百万円、合計53億29百万円（前年同期比6.8%増）を見込んでいる。売上が伸びないため、営業利益3億36百万円（同17.0%減）、経常利益3億22百万円（同8.5%減）、当期純利益1億73百万円（同21.7%減）と減少の見込みである。研究開発費3億9百万円、設備投資8億64百万円、減価償却費4億43百万円の予想でいずれも前期より増えている。ジルコニアの中間原料である脱珪ジルコニアは、2006年下期はキロ単位292円の予想で、2005年3月期上期の271円から約1割上昇、為替レートは、前期上期は1ドル109.64円であったが、当期下期は106円を想定している。

通期予想は、触媒59億34百万円（前期比12.0%増）、電子材料・酸素センサー 16億11百万円（同2.9%減）、耐火物・ブレーキ材15億98百万円（同0.8%増）、ファインセラミックス8億19百万円（同8.3%増）、その他10億38百万円（同7.3%増）、合計で売上高110億円（同7.1%増）を見込んでいる。また、営業利益7億70百万円（同19.6%減）と経常利益8億円（同12.2%減）は前期より減少の見込み、当期純利益は昨年あった特別損失がなくなり4億60百万円（同1.1%増）と若干プラスの計画である。

最後に、用途別に見た成長のイメージについて述べたい。光学材料は、アナログカメラからデジカメに代わっても、カメラの台数は変わらないので光学材料が飛躍的に伸びるとは考えられない。電子材料は若干減少傾向で、残されたシェアをどれだけ取れるかにかかっている。耐火物は付加価値の低い部分であるが、高温でジルコニウム化合物をつくる技術は大切であり、技術を社内に置いておく意味で生産を続けていくべき分野であると認識している。ジルコニウム製のファインセラミックスは、鉄と同じような粘性があり金属にない耐磨耗性、耐熱性を持つ素晴らしい材料である。また無毒なので人工骨などにも使用され、将来は脚光を浴びて使用量が増えてくる可能性がある。触媒は、底打ちから回復傾向に転じ、今後は徐々に業績が伸びていくと考えている。セシウムは、自動車が軽量化されアルミが使われるようになると溶接材として伸びていく予想で、また燃料電池は今後が期待できる。未発表であるが、ジルコニウムの用途と関連付けた新素材の開発も進めている。

（平成17年10月31日・東京）